

『すずの郷での看取り』について

『人は生まれた時と同じくらい尊まれて、逝く』
人は生まれた瞬間、人の手によって抱き上げられます。人は生まれたときと同じくらい尊まれて逝く。人の手の中で。そんな最期を過ごす。すずの郷で学んだ最期は本当に穏やかで感動すら覚えます。

今から60年ほど前までは、日本ではほとんどの人が自宅で亡くなっていました。祖父母は老いて行く姿を示しながら、生きることの意味を伝えてくれていた時代です。畳の上で生まれ畳の上で死ぬ。生きるということは「暮らす」ということ。「人生の幕は、歴史を刻んだ家で閉じたい」そう願いつつ、いつの間にか病院で生まれ、病院で死ぬのが当たり前前の時代になりました。人生の始まりと終わり。最も大事なシーンが暮らしの中から切り取られてしまったのです。そうして命の尊さはぼやけてしまった。

この10年すずの郷で看取りをさせていただき、人を看取することで本当に救われるのは、看取った私たちであったのではないかと思うのです。人生の完結シーンに優しく寄り添うことで逝く人から命のバトンを受け取ることが出来るのです。

人の最期に携わるというとても尊く、深いお仕事をさせていただいていることを改めて感じております。亡くなる方から受け取る波動ははるかに大きく、私たちスタッフはその波動の中で命のバトンを受け取っています。今を生きる、その大切さを今再び感じています。「今を一番輝きたい」を心に刻んでいます。



濱嶋いづみ

かけがえのない日々 ~すずの郷の看取り~

先月、西館の3人の方がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り致します。

みんなに愛された3名の方は、みなさん、すずの郷にてご家族やスタッフ、一緒に生活してきた仲間と囲まれ旅立たれました。

昨今、テレビや新聞などのメディアでも『終活』、『自宅での看取り』などという言葉が耳にするようになり、誰もが『死』について考えさせられる時代となってきました。

すずの郷でもこの10年、沢山の方とのお別れがありました。この沢山のお別れに寄り添う事で教えていただいたことは、最期のその一瞬まで、その人らしく人生を終えられるということ。死ぬと一言で言っても、同じ最期を迎えられる方は、一人もありません。その方が生きてこられた人生を表現するかのよう、皆さんその人らしく旅立たれた方はかりでした。

今月のすずの郷新聞は両面に渡って、すずの郷で看取りをされた永井哲子さん、大竹みち子さん、渡邊節子さんについて、最後の時を一緒に過ごされたご家族のメッセージと共に、すずの郷での看取りについてご紹介させていただきます。

皆さんと一緒に考えたいテーマです。ぜひご一読下さい。



永井哲子さん

~母の人生は狭い世界だったけど
すずの郷に来れたことが
母にとっての幸せな人生だった~
息子さんより



哲子さんとは出会ってまだたったの一年しか経っていない私ですが、最期は哲子さんを胸に抱き、人生最後の一呼吸までも一緒にすることを許されました。

哲子さんはいつも私のことを「キリエ」と呼び、呼ばれると草引きをしないかん、法事があるから...などお話してくれました。高鷲のユリ畑へ行かせていただいたときも一緒にリフトに乗り、大草原を見下ろすと「怖くないわぁ」と笑顔で答えてくれました。小さな体でピザをいっぱい食べ、鰻を平らげた時もビックリさせられました。脳梗塞で食べられなくなり、病院からすずの郷へ戻るとのご家族の決心には涙が出ました。

病院から帰る途中、ご自宅へ寄らせていただくことが出来ました。仏壇の前でご家族に囲まれ、哲子さんはほっとした様子でした。足をマッサージしたり、体をさすったり、唇を潤したり、私たちの出来ることは本当に小さなことですが、なるべくたくさんの時間を哲子さんと過ごしたいと思いました。息子様と娘様とお風呂の介助をさせて頂き、湯船に浸かることが出来ました。穏やかな呼吸で、ほっぺがぱっと赤くなり、気持ちいいなぁと言って下さっているように感じました。

最期はお嫁さんと大勢のスタッフに囲まれ、哲子さんのお部屋にはたくさんの人がいました。「てっちゃん」「哲子さん！」みんな一生懸命でした。お嫁さんが呼んでも呼んでも哲子さんの呼吸は戻ることはなく、天国へ逝かれたことが分かりました。哲子さんの大好きなピンクの衣装に着替え、お化粧をしました。お孫さん、曾孫さんもみえ哲子さんのお部屋は更に大勢の人であふれていました。悲しみの中にもご家族の温かみを感じました。矢合で生まれ、矢合へ嫁ぎ、家事と育児と畑、哲子さんの人生はこれだけだったと息子様は語ってくださいました。婦人会のお出掛けには行ったが、自分から誘うようなことはせず、記憶にあるのは家族でいった琵琶湖と恵那峡くらいだった...と。家族で再び思い出の場所へ行くことが出来なかった...私はそんな後悔の涙も溢れました。しかし「狭い世間しか知らなかった母の人生でしたが、人生の最後にすずの郷に来れたことが幸せだったと思います」と言って下さり、その言葉に救われた気がしました。



永井峰男様

(永井哲子様長男様)より

「縁あってお世話した哲子さんの最後をここで看取らせていただきたいと考えています」

看護師さんの言葉に正直驚きました。また母に寄せていただいたご好意に感謝の念が湧き上がりました。病院から戻ってきた母は、言葉は失われていましたが表情に張りが出てきたように感じられました。一週間ほどの間に3度もお風呂に入れていただきましたし、何よりも多くの方々に見送っていただけました。心身ともに浄らかな姿で旅立っていかれたと思っています。

すずの郷の皆様方、本当にありがとうございました。



退院の際、自宅に帰ることができました
懐かしい自宅でお仏壇を見て過ごされました



看取りの状態になってから、3回お風呂に入らせていただくことが出来ました。娘さんや息子さんに洗っていただき気持ちよさそうな哲子さん



ある日「妹に会いたくないな」と内田まつゑさん。誕生日のサプライズにと、娘さんに相談したところ、「こんなに沢山の親戚の方にお集まりで賑わしたところ、お話を弾み、最終はまつゑさん自ら「やっかんお誕生日おめでとう」お聞きありがとうございました。」

今月のベストショット



大竹みち子さん

~最後の最後まで
自分のことは自分で決める
最後までカッコいい
生き方をされた~



大好物のマグロをバラの形に

大竹みち子さんは西館がオープンして以来5年間ずっと一緒に過ごしてきました。おしゃれで化粧水にもこだわって、好物のパンとはちみつを三度の食事に召しあがってみえました。見学者の案内を自らかってでくださり、冗談を言って笑いを交え、時にはかぶりものをしたりとヒョウキンで明るい雰囲気をつも作って下さっていました。

骨折で手術をし、最初はリハビリも頑張って「もっと歩けるようにならんとすずの郷へは戻らんよ」と言っておられました。戻ってきたみち子さんは布団から起き上がることも難しくなっていました。

息子さまが毎日のようにマグロや飲み物を届けて下さり、マグロを二口食べて「美味しい...」とみち子さん。何とかもう一度お元気になって頂きたいとお風呂にお誘いしたり、お散歩にお誘いしたり、試行錯誤の毎日でしたが、最後まで自分のことは自分で決めるみち子さんでした。みち子さんらしい、強い女性、最後までカッコよかったとスタッフの誰もが感じました。

大竹達夫様 (大竹みち子様次男様)より

94才の母が骨折で入院してリハビリもやっていたのですが、その内、しんどいと言うようになり、気がだんだん失われてきました。水分も食事もあり取れなくなり、医師からはいつどうなるかわからないので、覚悟だけはしておいて下さいとの事。延命治療はどうしますか?と聞かれ、もう穏やかに最期を迎える事を希望。

入院中も早くすずの郷へ帰って大好きなまぐろを食べたい。すずの郷は自分の家で、ここにいるのが幸せだと言っていたので、最期はすずの郷で看取り介護をしてもらう事にしました。

退院も寝台車を用意して迎えて下さり、帰るやいなや母の大好きなマグロを用意してく下さり、口に含んだ時の母の幸せそうな顔は、今でも忘れられません。常にだれかかれかが側に寄りそって母はとても幸せそうでした。旅立の時には、きれいにお化粧も身支度も整えて下さり、生前の母のままでした。

本当にスタッフの方には感謝の一言につきません。ありがとうございました。



お相撲さんにチュー



ご家族と一緒に



名古屋市科学館や藤祭り...色々な所に出掛けました



ユニット忘年会や西館の皆さんと行った旅行での宴会にて

渡邊節子さん

~うなぎが食べたい!!
亡くなる前日に
自宅に帰ることができた~

「うなぎが食べたい」脳梗塞で倒れてからペーストの食事を食べておられました。すずの郷で願いを叶えることができました。ご自宅へ行って仏壇に参り、節子さんは起きる時間も増えていきました。虚血性腸炎にて救急搬送され、娘様の決断ですずの郷へ戻ることが決まりました。病院の帰り道、ご自宅へ寄らせて頂き、仏壇の前でアイスクリームを食べることができました。まだ会話もできました。「お部屋へ戻りたい」すずの郷のご自分のお部屋のことでした。節子さんがすずの郷を選んでくださってみる。そう分かった時、胸が熱くなりました。

しかし次の日、節子さんは天国へと旅立って逝かれました。退院した次の日という事もあり、まだまだこれからだと思っていただけに、突然の死に涙が止まりませんでした。亡くなる間際、スタッフに囲まれ「節子さん、鰻食べなくっちゃ」の声にちゃんと応えてくださった節子さん。その日の朝に鰻を二口たべることができました。自宅に帰って、自宅を見て、娘様を見て安心され、節子さんのお顔は本当に安らかで穏やかだったのです。キレイな水色の衣装に着替え、お化粧をする頃には思い出話で娘さまから笑い声が漏れるほどでした。「私もすずの郷で看取りしてね」その言葉に救われました。本当はもっともっと節子さんと一緒に過ごしたかった、まだまだやりたいことがあった。その願いは叶わなかったけれど、最後の最後で節子さんがすずの郷を選んでくださったことに心から感謝をしたいと思います。



別府純子様 (渡邊節子様次女様)より

母は入院して医師から今は低空飛行の状態が高齢(91才)でもあるので、いつ急変するかわからないと言われました。点滴等による苦痛をなくし自然の形で亡くなる事を願っていた時、すずの郷さんから看取りをして頂ける事を聞きすぐ病院からすずの郷さんに移りました。亡くなる前には口からアイスクリームも頂きました。

スタッフの皆さんに見守られ安らかに死を迎える事ができました。すずの郷さんで看取りをして頂き家族一同感謝しております。



季節を感じて あじさい祭りとおじさい風呂

6月といえば『あじさい』!! 性海寺のあじさいを見に行ったり、あじさい風呂に入っていたりして、季節を感じていただきました。

性海寺に行かれた嶋谷喜代子さんからは「何種類もの、何色にも分かれて咲いているあじさいを見て、あー6月だなと、季節感を味わうことができました」と感想をいただきました。



大野秀康さんは、性海寺で偶然仲の良かったお友達に再会!! 思わぬ外出となりました。

